

## < 代替肉って何? >

### ○ 代替肉とは?

代替肉とは、その名の通り、豚肉や牛肉、鶏肉といった動物の肉を使わず、植物などの別の素材で代替したもの。この代替肉について、特に菜食主義者の拡大、環境面の配慮などから、急速にその市場が拡大しつつあります。

アメリカでは西海岸を中心に、フードテックにおける代替肉の成長がめざましく、代替肉市場は2017年から2019年にかけて、37.8%の伸びを見せています。特に、ハンバーガーの代わりとなる牛肉のパティに似せた植物性代替肉から始まったビジネスは、多くの著名人からも投資を集め、ユニコーンビジネス（価値総額が10億ドルを超える企業）となりました。

### ○ 日本における代替肉

まだアメリカほどではありませんが、日本でも代替肉を日常生活の中で目にする機会は珍しくなくなってきました。

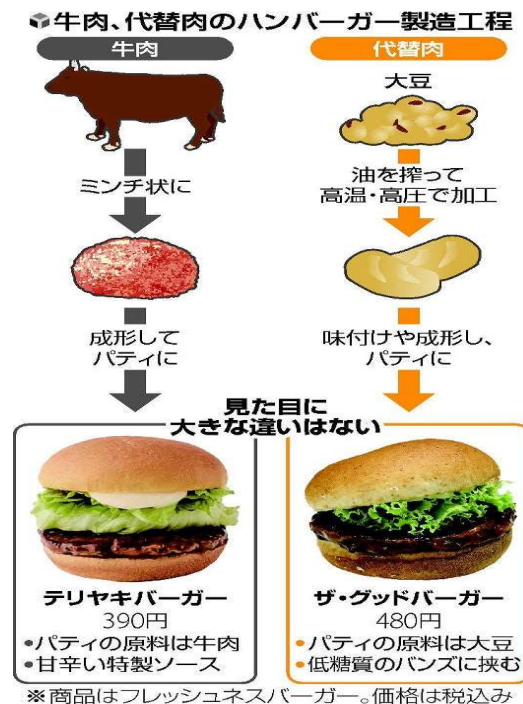
例えば、モスバーガーのグリーンバーガーやドトールの全粒粉サンドのパティはいずれもプラントベースです。（植物由来の食べ物を中心とした食事法のこと）

さらに、2020年7月にはコメダ珈琲店が銀座に全メニュープラントベースの店舗をオープンしました。

チェーンのカフェや飲食店に加え、スーパーやコンビニエンスストアでも、大豆ミートなどの代替肉商品は増えています。



（無印良品の代替肉シリーズ）



### ○ 代替肉が注目される理由は?

代替肉市場がここまで大きく成長している背景には、大きく分けて4つの理由があります。

#### ・動物倫理

現在世界で流通している食肉のほとんどは工場式畜産のシステムからきており、動物を人の手で搾取し商品として製造・販売する大規模な畜産のあり方に疑問視する声が増えつつあります。

#### ・環境面

多くの水を要する上に水質を汚染し、さらには飼料栽培も含め地球上の土地の大部分は今畜産に充てられています。しかもそれが増加しているため、アマゾンの森林火災や世界中の森林伐採にもつながっていることに加えて、大量のメタンガスを発する牛は、地球温暖化の大きな一端を担っています。

#### ・食の不均衡

商業的畜産が拡大すると同時に、世界で食の不均衡も生まれています。現在世界で育てられている大豆のうち、家畜の飼料に充てられている量は9割近くにもなります。大豆や穀物を育て、家畜に与え、精肉し、一部の人しかそれを食べられない現状は効率がいいとは言えません。現に、畜産は全体の18%のカロリーを提供するにとどまるのに、世界中の農地の83%を占めています。畜産を減らし、多くの人々が十分に食べられるものへのアクセスがある仕組みに変えることで、世界の飢餓人口を減らすことができます。

#### ・健康面

個人の健康面を考慮した選択です。肉食過多の食生活の場合、がんや心臓疾患など健康上の支障が出る可能性が高まると言われています。特に赤身肉と加工肉の摂取量に関しては注意が必要です。

### ○ 代替肉の問題点

インポッシブルフーズ社は商品化にあたり、FDA(アメリカの食品医薬品局)から食品として安全性の認可を受けるため、最小限に規模を抑えつつもラットを使い動物実験をして、それを動物愛護団体から非難された事実があります。画期的なプロジェクトであるゆえの決断には賛否両論があります。また、インポッシブルフーズ社は原料に遺伝子組み換えを行っている一方で、ビヨンドミート社は、動物実験も遺伝子組み換えも行っていません。また、代替肉は往々にして加工品であり、健康的かどうかの判断は個人間で差異が出ます。

### ○ 代替肉の今後

先述のThe Good Food Institute のレポートによると、現在代替肉が占める食肉市場全体の割合は1~2%。まだ小さな市場ですが、その成長率は、現在牛乳・植物性ミルク市場の14%を占める植物性ミルクが成長を見せ始めた頃の兆しに似ているという分析もあります。

また、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックに伴い、アメリカで代替肉の売り上げは264%伸びたという報告もあります。肉の流通が止まったことや、さまざまな感染症と食肉市場の関連がニュースで頻繁に取り上げられたことなど、考えられる理由は多くあります。

動物倫理、気候危機、食料不均衡、健康維持、そして世界的なパンデミックなど、畜産と肉の消費について、見つめ直す理由は揃ってきています。

代替肉は、多くの生活者にとって身近な肉の、文字通り代わりになる存在として、今後も大きく伸びることが予測されています。